

座談会「生まれ変わる国際学部」

日時 = 2016年6月1日（水）16時～17時30分

場所 = 国際学部学部長室

対談者 = バーバラ・モリソン、スエヨシ・アナ、高橋若菜、松村史紀、田口卓臣

はじめに

国際学部長 田巻松雄

国際学部は2017年4月から現在の国際社会学科と国際文化学科の2学科体制を国際学科1学科体制に改組します。8月末に正式に文部科学省より認可されました。文科省でのヒアリングは7回に及びました。振り返ってみて、文科省から、「国立大学唯一の国際学部としてぜひ他の国際系の学部や学科を引っ張っていくような学部になっていただきたい」という趣旨の意見が何度か繰り返されたことが一番強く思い出されます。このことは強く心に刻んでおきたいと思います。

改組の目的は、「グローバルな実践力」を持って国際的分野で活躍する人材育成の機能を強化することにあります。そのために、「グローバルな実践力」の基盤として多文化共生に関わる社会科学と人文科学が一体化した体系的な教育プログラムを構築します。さらに、世界の様々な地域でチャレンジ精神・協調性等を持って主体的に行動するために必要なコミュニケーション能力や行動力・協働性等の実践的な能力を養

成するために、社会系と文化系が融合したアクティブラーニング科目としての少人数演習や海外経験学習、国際キャリア教育、外国語教育を強化します。人文科学・社会科学の教員は「一匹狼」的な性格が強いですが、今後は学部としての特色ある教育をより組織的に進めていくこととなります。

国際学部は学際系・総合系の新構想学部として2004年度に発足しました。その歩みについては、20周年記念事業として一昨年に刊行した資料集『国際学部の20年』をぜひご覧いただきたい（学部HPからダウンロード出来ます）。新構想学部は学際性・総合性のゆえに学部の特徴が見えにくいという課題を共有してきたと言えると思います。新国際学部が何を目指すのかについて、様々な方法で分かりやすく発信していきたいと思いますが、その一つとして、改組が確定的になった時期に、学部の特徴や新学部に対する想いを教員間で語り合ってもらった座談会を企画しました。国際学部には約30名の教員がありますが、ジェンダー、年齢、国籍、多文化などを意識しつつ、「飛び切り」熱く語ってもらえるであろうと思える5名を独断で選ばせて頂きました。他の教員には別の機会に熱く語っていただきたいと思います。国際学部の「多様な学び」と「面白さ」をぜひ感じ取って頂きたいと思います。



節目としての『世界を見るための38講』

田口：国際学部は現在、2017年度からの改革案を、文部科学省に申請中です。この改革案は、『世界を見るための38講』（下野新聞新書、2014年）が呼び水だったのではないかと僕は考えています。

『38講』は、学部創立20周年を記念して企画されたもので、国際学部教員と留学生・国際交流センター教員のエッセー集です。この本では、38名の教員が、自分の研究と教育について紹介しています。出版の経緯についてはあちこちで述べたので省略します（「『世界を見る』とはどういうことか?」、『UU now』35号、2014年10月30日、pp.2-3 / 「読めば世界が見える」、下野新聞2015年1月7日（水）朝刊）。ここで強調したいのは、『38講』で建てた編集方針が、現在の改革の方向性を先取りしていた、という点です。

これまでの2学科（国際社会学科、国際文化学科）という区分をやめて、1学科（国際学科）に統合する——改革案のポイントは、そういうことです。これは別の言葉で言えば、「社会科学系」と「人文科学系」という括り方をとって、分野横断的な国際学部の特徴を前面に押し出す、ということの意味しています。『38講』の編集方針も、まさにこのような考え方に基づいていました。

例えば、『38講』の第1章には、いわゆる「国際関係」に関連するエッセーが集まっていますが、そこでは、国際関係論、国際経済論、国際人権論、国際政治学など、社会科学系のエッセーばかりでなく、「文化相対主義」の概念を説明した人類学のエッセーも入っています。その後に続く各章でも、こうした学問的混交を推し進めています。国際学部の多視点的なスタンスを強調するために、社会科学と文化学科の教員の思考群をひとつにシャッフルしたわけですね。いま振り返ってみると、あの本を編集する

過程において、現在の改革の方向性が宿されていたように見える。その意味で、『38講』は、国際学部にとっての節目だったのでしょうか。

しばしば、「国際学部のしていることは複雑で分かりにくい」という言い方を耳にします。新しい改革案は、これまで説明不足だった点について分かりやすくしようと努めたものです。しかし一方では、国際学部ならではの学問的な多様性を保存することにも注意を払っています。学科をひとつに統合することで、「学際性」、つまり学問的な「多様性」や「横断性」をいっそう浮き彫りにしようというねらいがある。『38講』を編集していたときに、僕は冗談で第二次大戦前の京都学派を引きながら、この新書は「一即多」であり「多即一」である、と言っていました。今では学部そのものがまさに「一即多」になってきた。

松村：今田口先生がおっしゃったことは、とても重要なことです。問題は学生がこのことをきちんと理解できていなかったのかもしれないということです。新入生セミナーで、これをテキストにして読んでもらっていますので、そういう意味では、我々の意図を直接学生が汲み取って、今後の4年間の勉強にあてる、できるようなには配慮したつもりです。

また、せっかく多分野の教員がいるのに、すべての授業をとらないでも卒業できてしまうので、近い研究分野の先生のことさえ知らないで卒業してしまうということがありました。新書では全教員の問題関心が一通り俯瞰できるので、学生は広い視野に立って自分が何を学ぶか決められます。そういう点でも、意味のある本かなと思っています。

田口：一般に「改革」といえば、カリキュラム・ツリーが問題になります。こういうツリーを作ることに、反対ではありません。ただ、教育現場での感覚に基づいていえば、いわゆる「ツリー」によって表象しえない根っこの部分、つ

まり「根茎(リゾーム)」における知的胎動こそ、最も重要ではないかとも思うんです。学生たちは、人文社会系の授業を横断的に受講することで、それぞれの教員の立ち位置や授業の内容を比較したり、批判的に捉えたりするわけですから。そこには、段階的に知識を積み上げていくのとは別様の、もっと複雑で、網の目状の知的営みが控えているはずで。『38講』は、そのような学問観=教育観を表現しようとした新書だったのだと思います。

マニュアルの通用しない世界

モリソン：様々な観点から見える。というのは外から見ると、ちょっとカオスな雰囲気があるかもしれない。実際、学部に入ると、みんな一生懸命、クリティカルシンキング (Critical Thinking) を使いながら何が大事なのか、そういう精神やみんな平等で持っているから、これが一番大事じゃないかな、つまり多文化です。国際学部でも。実際にやっているという説明になるのではないかな。

田口：確かに、一見カオスに見えるかもしれない。けれども、各教員の研究・教育の在り方においては、一本の筋が通っていると思います。ひとりひとりの教員が、複数の分野の垣根を超えて、共同でものを考えたり、創り上げたりしようとしてきたわけだから。具体的には、「国際キャリア開発セミナー」、「HANDS プロジェクト」、「福島・乳幼児妊産婦支援プロジェクト」(現在、「福島原発震災研究フォーラム」) など、『38講』のコラムで取り上げたプロジェクト群が、それに当たります。3.11以降、こうした学際的な眼差しが不可欠となるような課題が、一気に噴出してきたように思います。

モリソン：国際社会はわかりやすくないです。簡単ではないので、いろいろな観点、マイノリティとか、プレゼンスのない方、セクシャルマイノリティとか、ニーズは様々あります

ので、学生が複雑な世界を見て、どういうふうによればいいのか、サポートすることが私たちの義務だと思います。

高橋：いまモリソン先生がおっしゃったとおりですね。わかりやすくない世界を、そのままわかりやすくないものだと、それをとらえるには多視点で捉えなくてはいけないということが、共通の意識として持っているということが、国際学部が一番の特色です。それが『38講』の中で、見事に全教員が体现しているところが、読んでいておもしろいところです。『38講』の田口先生の解説には、「どんなエッセーにも、小さなもの、弱いもの、スローなもの、異質なものの、複雑なものを見落とすまいとする意志が流れている」と書かれてあります。そういったものに注意を払わずに、一つの分かりやすいストーリーに回収してしまったとたん、様々なひずみや問題が生じてきます。それに対して、多視点的にアプローチして考えていきましょうよ、ということですね。それがまさに、異文化理解能力であるのだとおもいます。一方、社会科学がめざすところの、問題・課題発見、課題設定能力もとても大事です。でも課題設定のやりかたを一つにしてしまったとたん、そこからこぼれ落ちる、あるいは新たな課題が生じる、ということもあります。多視点的に、互いを理解しあい、きちんと注意を払っていきましょう、ということがおそらく社会、文化の両方を融合できないか、ということではないかと私は理解しています。

田口：既成のマニュアルが通用しない世界に、どのように対峙していくか、ということですね。「こうすれば、ああなる」といった「傾向と対策」は、今日ではほとんど成立しえなくなっている。「こういう知識を教えれば、こういう人材が育ちます」——こんなお手軽な教育観の虚構性が、無残なくらいに露呈しています。これは学生たちだけが直面していることで

はありません。われわれ教員も、自分がどのように生き抜いていくかを自らに問わなければならなくなっている。

高橋：サバイバルな力を持って、問題を多視点的に設定して理解する能力があれば、社会の課題に対応していける、そういう人材を育てていくということですね。それが我々の出口戦略だと思います。

多国籍的環境のなかでクリティカルに考える

モリソン：難しいのは、私はアメリカ人ですが、日本はちょっとクライシスだと思います。学生はこれから見えない社会をつくらなければならないです。まだ現実にはないんです。ワークライフバランスとか、人口の問題とか、見えない、解決されていない。学生は、見えないことをどういうふうに見えるようになるのか。想像力とか、サポートしなければならない。統計と事実を見ながらどう思うのか。これは非常に大事なことだと思います。

スエヨシ：先生方が述べた「国際社会もしくは世界はわかりやすすくない」を聞いて浮かんだことは、多様性でした。そもそも人間はそれぞれ異なり、私益・自分の恩恵だけを求めるに限らず、コスモスヴィジョンも異なるので国際舞台でどんなやり取り（取引、交流、外交等）でも交渉なしでスムーズに決まるわけではないと感じる。私たちが実施する授業・研究内容の中に多様性というテーマがありましたが、国際学部生の最大の特徴は多様性と言っても過言ではないと感じる。国際学部で行っている授業の参加者は大多数が日本人ですが、留学生も多く日本人の中でも北海道から沖縄まで全国から学生が集まっている。学生は各地域の文化を持ち、関心分野も異なる中で国際学部の学際的な教育から興味ある分野・テーマに沿った授業を選択している。国際学部は異なる文化を持つ人たちに教育・研究・交流できる場を提供するこ

とで学生は多様性という課題を日々経験している。異なる文化・専門・国籍を持つ国際学部生にとって多様性は障害ではなく、武器である。そのため、多様性が国際学部の代表的なキーワードであると思う。

田口：僕らが授業をしている教室の空間が、そもそも多国籍的ですよ。アジア、中東、ヨーロッパ、中南米、北アフリカなど、様々な国からの留学生がそこで勉強しています。日本国内の地域という観点から見ても、学生の出身地は多様です。それから、国際学部は何と言っても女子が多く、男子のほうがマイノリティー化している。教員の構成から見ても、女性の比率が高いです。にもかかわらず女子大ではないので、日本社会に固有の均質さや画一性は微塵もありません。どのような授業環境を取り出してみても、あらかじめ異質なものの混交が実現されているところに、国際学部の特色があると思います。ちなみに法人評価の報告書を執筆していて気付いたのですが、宇都宮大学から海外に留学生を送り出しているのも、圧倒的に国際学部ですね。

モリソン：国際学部の授業はおもしろいです。海外に行かなくてもいいくらい環境です。

高橋：基礎的な学問から、実践的な科目も含めて、多様な構造になっているところも、魅力一つだと思います。特に国際協力分野の先生たちがリードされている、キャリア合宿やインターン等、社会との接点も多いですね。留学をする学生がとて多いのも本学部の特徴ですが、近年みていると、留学も実に多用です。交換留学は半分、あとは、フィールドで実践的にインターンとして半年海外に出るとか、あるいはもうすこし短期で語学研修だけとか、そういう学生がたくさんいます。留学に行かない学生たちも、国内でも留学生のチューターをしたり、国際問題についてイベントを行ったり、世界を身近なところで、あるいは世界規模で耕

している学生が非常に多い。そういう意味では、机上から実践的なところまで、つながってきているという印象です。

田口：きちんと現代社会を観察していれば、外見的な均質さの向こうに、どれほど複雑で、どれほど多国籍的背景が控えているかが見えてきます。一方、その現実を直視しようとしないうち、あるいは積極的に否認しようとする排外主義的な動向も前景化しています。なぜ、そのような否認が起こるのかという問いも含み込んだ形で、僕は「複雑系」としてのこの社会の条件や構造を見据えていかなければなりません。その際に、国際学部環境というの、ある種のフロンティアとして機能しようと思えます。ややオーバーに言えば、ここが世界の縮図である、と。スモールな場であるぶん、複雑な世界の表象がここに圧縮されているのだと、僕としては捉えてみたいですね。モンテニユは、自分は書物から世界を学ぶのではなく、世界という書物を読むのだ、と言いました。国際学部というフレームは、「世界という書物」を読むためのメガネのようなものです。

モリソン：先生から学ぶだけじゃなくて学生の具体的な経験とか、どう思うのか、それが本当に大事です。マニュアル・シンキングではなくて、クリティカル・シンキングですね。

国際学部の学生について

高橋：ゼミやサークル活動に関わっている学生や、留学する学生たちをみると、自律的に、オリジナリティを持って行動できる学生が増えてきているという感触があります。決められたルールに乗るというだけではなく、自分で切り開いて新たにチャレンジしている学生もいて、多様です。出身地も、全国あちらこちらから来ているということがあると思いますが、特に国際学部は東北出身の学生が多いという事情があります。今の学生さんたちは、2011年の

東日本大震災に遭い、極限的な状況にいた人もいます。中学生、高校生という多感な時期に、そのような経験をした学生さんたちは、これまでの世代のように、のんびりとした状況が続くと思っていたのとは全く違う世界観を持っているように思います。そういう学生が増えてきたという印象です。

スエヨシ：私が担当する選択科目の「Introduction to Latin American Studies」（ラテンアメリカ論入門）と「Latin American Politics and Society」（ラテンアメリカ政治と社会）の授業は、英語で行うため相対的に様々な国籍の学生が出席する。毎週予め課題を読んでもらい、授業中にディスカッションを行う。学生の文化も異なる上、若いにもかかわらず経験も異なるので観点もそれぞれである。学生全員が同じ部分を読んでも捉え方が異なるため深みのあるディスカッションができる。そのため学生は納得する結論に至るまで意見交換をすることで授業に大いに貢献している。例を挙げると、ラテンアメリカの植民地について取り扱った際に植民地だったマレーシア出身の学生の発言によって、ラテンアメリカと東南アジアの共通点と相違点にも触れることができた。また、ラテンアメリカの移民の話の際には、日本人移民の話まで広がり北海道出身の学生が地元の歴史と繋げて国境を超えて日本人開拓者がフロンティアを拡大していたことに同感していた。「ラテンアメリカ論」と関係がある科目は学生と関係のない分野ではなく、自分の文化と繋げる学生が中にはいる。毎年2年生がよく受講するので受講者が異なることで授業内容も異なる。毎年興味深い授業となるため私自身の勉強になっている。

モリソン：日本では相手が自然に、何も言わなくてもわかってくれる、ということが多いのですが、国際学部でははっきり言わないとダメですね。

田口：相手が自分の言いたいことを理解してくれるとは限らない環境というのがある。そのような環境のなかで、言葉を紡いだり、行動を起こそうとする学生たちが比較的多いように感じます。

高橋：そうですね、私のゼミでは、一般には思いもよらないような面白い企画を考える学生が、出てきています。例えば、私はゴミの研究をやっているのですが、生ゴミが多くて、それを減らさないといけないという話がある、一方で途上国だけでなく日本の中で貧困層が増えている。それで、フードバンクというアイデアがうまれてきているとします。そういう企画を、学生同士が軽々と、壁を乗り越え、企業と提携してプロジェクトにするとか、Table for two を始めてみるとか、そんな学生もいます。タイの子どもたちに絵本を贈るというサークルもありますね。本を読むというのは学問の一番の基礎なのですが、それに加えて映像資料などの重要性に気づいた学生が、映画の上映会を自分たちで企画したり、イベントとして話し合いの機会を作ったり。

田口：行動力に富んだ学生が多いですね。こちらがいちいち何か勧めたりしなくても、自分の頭で考えて、自分で決めて行動に移していく学生が、増えてきている気がします。たとえば去年、卒論の最優秀賞をとった学生さんはすごかった。清水奈名子先生のゼミ生で、僕も卒論を読ませてもらったのですが、とにかく驚異的な行動力の持ち主です。家にいられないような「隠れストリートチルドレン」たちと三か月間も寝食をともにして、そのときの共同生活を基に卒論（城田美好「義務教育過程における貧困の再生産と『隠れストリート・チルドレン』 - 精神的苦痛を抱える社会的排除の犠牲者についての考察」）を書きあげた。最初は「うるせえ、ばばあ」なんて罵倒を浴びていたのですが（笑）、とにかく不良たちの信頼を勝ち取る

まで、一緒に路上で寝起きしていたというツワモノです。興味深いのは、一見「例外的」に見える不良たちの生活が、実は日本の貧困問題の縮図であったという洞察を実証しているんですね。

モリソン：国際学部では、彼女は国際キャリア開発プログラムの実施委員会でいろいろやってくれた。私たちは、学生の自信をサポートしながら、すごい研究をできる学生を育てます。

田口：教員が育てるといふのはちょっと違う、と僕は思っています。彼らがみずから育っていつてしまう、ということだと思う。そのような子たちが集まる場として、この学部の環境が機能しているのではないかと。

高橋：卒論の話をもっと補足すると、彼女のやった手法は三ヶ月の参与観察手法です。普通だったら研究費をとって一生懸命やるところを、軽々と学生の身分で入り込んで、そこから引き出していく。学生だからこそとれるデータ、引き出せる言葉があるのです。そういうことをやって日本の若者の貧困の問題をあぶり出しということは、本当にすばらしかったし優秀でした。ただ、怪物的というお話がありましたが、彼女だけではないとおもいます。

私のゼミでも、一人、優秀論文に選ばれた学生がいます。スウェーデンやフィンランドの放射性廃棄物の最終処分場建設をめぐる合意形成が、研究テーマでした。彼女は、私が毎年夏休みに行なっているスウェーデンでのゴミのフィールド調査に、まず同行しました。一緒に回ってインタビュー等いくつか経験したあとに、今度は自分でどんどん約束をとって、スウェーデンやフィンランドの最終処分場まで行って、自分で足をかせいで、政策担当者や市民にインタビューをしていました。卒論を書く一年前までは、彼女は正規の交換留学生ではなくて、ワーキングホリデーでカナダに行っていました。そういう意味では、語学は達者でした

が、留学体験とはまた違った、コミュニケーション能力をつけてきています。国際学部は、そのような、自ら力をつけて、キャパシティを育てる土壤があるとおもいます。国際学部全体のカリキュラムの中で、自分でものを考え、行動する自律的な学生が育ってきているということではないかと思っています。

田口：僕の卒論ゼミからは、大学院の美術史専攻に進んだ学生が、2年連続で出ています。ひとは神戸大学の大学院、もうひとは日本大学の大学院に行きました。二人とも、それぞれの大学で教えておられる美術史の大家（カラヴァッジョ研究の宮下規久朗先生とニコラ・プッサン研究の木村三郎先生）から、卒論の内容を激賞されています。木村先生からは直々にお電話もいただきました。これは特に僕の指導が優れていたからではありません。そもそも美術史に関しては、僕のゼミ生たちは出羽尚先生から手ほどきを受けてましたから。僕が彼女たちに特訓したのは、英語とフランス語で書かれた評論の精読ですかね。これは週三回くらいのペースで指導しましたが、正規の授業外でそんなことをやろうという気になったのは、彼女たちの能力と意欲がずば抜けて高かったからです。「特訓お願いします！」と訴えてきたときの迫力たるや凄かったですよ。

高橋：全体の人数は少ないけれど、各々の秀でた能力を発揮する学生が出てくるというのは、この学部が持つ魅力ですね。加えて、おそらく、少人数教育の良さが出ているのだろうと思います。

これからの国際学部

モリソン：留学生の役割が大きいと思います。交換留学。日本の学生と海外からの学生も、もっとグローバル環境を実際に学生が日常生活で参加できる国際学部のキャンパスをつくることは大事だと思います。留学生を積極的にイ

ンクルードする授業が重要だと思います。

高橋：教授会でのカリキュラム改革を議論をきいていると、ますます垣根が無くなっていくのだろうという印象を受けています。学生は今も多様化していますが、もっと多様化するでしょう。その時、実践的に活動的に動くばかりが重要なことではないとも思うのです。むしろ原典をしっかり読んで学問的深さを追求する学生もいていいと思います。その多様性というのが垣根がなくなる中でますます増えていってほしいと思っています。

カリキュラムが多様になるなかで、アクティブラーニングも推奨されています。それぞれの創意工夫の中で、いろいろな良さが出てくると思いますが、アクティブラーニングは、座学や高度な学術書の輪読をおろそかにするということと同義ではないと思っています。そういう授業もあってもいいし、多様な授業がむしろよいのだと私は理解しています。共通するところは、多視点ということと少人数教育を前面に出すということで、これらはこれから続いていくのだろうと思います。

田口：地域デザイン科学部が創設された関係で、今年度から国際学部の定員は若干減りました。学部の規模がよりスモールになったことで、学生たちが受けられる教育はより濃密になります。この学部の特色である少人数教育が、いっそう純化されたと言えいいでしょうか。幸いなことに、2月に実施された入試の倍率は、国際学部だけ6倍に達していました。この学部に対する社会的な関心が高まりつつあるのは、嬉しいことです。この学部でやりたいことにどんどんチャレンジしてほしいですね。

モリソン：ただ希望を持っているだけじゃなくて、実現させるために何をすればいいのか、具体的に、地域とか、例えば、多文化公共圏センターの益子プロジェクト、私も日光プロジェクトをやっていますが、学生はこれから益子と

コネクトしたらいいのか、観光客のために何が必要なのか、まちの活性化に何が 필요한のか、本音で話ながらやっていこうという。授業だけではなく、実際にやる訓練、が大事なのではないか。

田口：国際学部は今年度から特別入試として国立大学で初めての外国人生徒入試を始めました。必ずしも母語話者のように日本語を操れるわけではない外国籍の子たちが入学しているわけです。このような制度は、当然ながら、若い子たちに様々なチャレンジの回路を示唆する、国際学部ならではの環境を推進するものです。ついでに言うと、国際学部には、「内地留学生」という制度もあります。栃木県内の小中学校には外国人児童生徒が増えてきていますが、その子たちに教えている先生たちが、この国際学部に「留学」し、ポルトガル語を初めとする科目を受講している。これは若い学生たちにとっても刺激的なことではないでしょうか。

松村：国際学部では推薦入試によって入学して来る学生が多いんですね。半数近くが推薦入試で入って来ます。入学前から問題意識の高い学生が入ってくるというのは、学部にとって重要な資産ではないかと思います。そういう学生がイニシアティブをとって、サークルや学内外の活動をオーガナイズしていくという印象を持っています。

高校生に期待すること

松村：まず国際学部の新書を読んでほしいですね。読んだ上で、自分が暮らしている社会の中でいままで気づけなかったけれど問題だと新しく思ったことを自覚的に考えてほしい、というのが具体的、より直接的な要望です。

スエヨシ：関東地域・県内高校の出前授業を行う際、高校生の授業の様子を見て私は大学生の新生入生に求めている授業態度（授業への積極的な参加）を期待しない。高校教育は一方的で

受け身的であると伺っているので、情報をそのまま吸収し批判的思考・意見交換を行わないため国際学部の授業方法には慣れていないと感じてしまう。私自身大学1年生の授業を担当していないので、2年生から私の授業に参加する学生はディスカッションに慣れていて、意見を発することに不安が残る学生も頑張っ意見を出すとともに外国語での発言も試みる。批判的思考と意見を発言することは国際学部の入試から行うので、まず国際学部への入り口として、『38講』を読んでもらいたい。そして、国際学部HPに記載されている「教員が選ぶ推薦図書」も読んでほしいと思う。

モリソン：学生は頭がいい。けども、高校の制度、教育はちゃんと答えなさい、ルールが多いみたいです。つまり、大学の演習では考えながら話す、というのが一番大事。高校は試験のように一つしか答えない。

田口：一般に、日本の小中高の教育というのは、先生が言うことを鵜呑みにさせるか、あるいは、先生の期待する内容を読み取らせようとするかのどちらかになりがちです。その時点で「考えること」は閉ざされてしまう。

モリソン：思考停止の練習です。

高橋：一番大事なのはまず自分で考えてみようとする事ですよね。何でもチャレンジしようとする事。いろんな世界の多様性に目を向ける事ということ。今まで当たり前と思ったことを疑問視すること。そして思考をとぎさないこと。

高校生と話す機会があったのですが、これからの時代、どうせ年金もらえない、なかなかいい仕事に就けないとか、悲観的になってしまいがちです。社会全体が何となくブラック企業化してきているところも確かにあります。そのことについて、もういいやとあきらめてしまっている人もいますが、そういう学生に対して、昔のように右肩上がりではないけれども、絶望

しないでほしいと伝えたいと思います。ぜひ希望を持って混沌とする社会の中で未来は自分たちでつくるんだという感覚を持っていただきたい。

報道をみていると、学生たちが選挙権を持つにあたり、一番悩み困っているのは高校の先生たちのようです。学生たちは語りたい、議論したいという空気があるようですが、学校側は中立的でなくてはならない。でも、はじめから一つの中立というのではなく、それは中立でなくて一つに過ぎません。様々な意見があってはじめて中立になるのです。先生たちの意見も一つ、それ以外も間違いではない、議論したい学生の意見を多様に引き出し、ぜひ、そこを伸ばせる環境になってほしいと思います。

田口：ちなみに新入生セミナーで、学生たちといっしょに『38講』を読むと、なかなか面白い反応が返ってきます。この先生の文章は、こういう観点で説明不足じゃん、なんて手厳しい批評が飛び交っています（笑）。『38講』そのものを鵜呑みにする必要はまったくないわけで、そのような学生たちの議論の場があるというのは良いことです。

モリソン：クリティカルシンキングが大事。理想は先生がいなくて、学生同士でクリティカルシンキングを続けること。多文化とか問題解決能力の醸成とかいろいろサポートしています。たくましい学生を育てたいですね。社会の厳しさを乗り越える。

高橋：そうですね。バランスのとれた学生というのでしょうか。ブラック企業、ブラックバイトが増えている中で、言われるとおりにやっていたら自分のやりたいことが何もできなくなるという状態を、この時代に、すでに学生たちは経験しているようです。自分の頭で考えて、自分で優先順位をつけて、ここまではできますが、ここからはできませんと、ノーというときはきちんとノーと言えるような、バランスのと

れた自律的な学生を育てたいですね。

松村：問いを立てる訓練をする。例えば、オバマ大統領が広島を訪問したのはどうしてか。「どうしてそうなったのか」と「どうしてそうならなかったのか」という2つの問いを考えてみるとよいと思います。後者の問いについては、そもそもそのような問題に気付くことさえ難しいので、よい訓練になると思います。ひとつだけ例題を挙げておくので、受験生が読んでいたら考えてみて下さい。今年2月、北朝鮮の核実験を受けて、韓国の朴槿恵大統領は中国の習近平に働きかけるため、直通の電話を何度も鳴らしましたが、一ヶ月近く習近平はそれを取りませんでした。習近平は米韓同盟をゆさぶる大きな機会を自ら失いました。いま中国は米韓同盟の強硬策に手を焼いています。さて、なぜでしょうか。

田口：与えられた問題の正解を出そうとするのではなく、ひとが当たり前だと思いこんでいる事柄に「問題」を見出すこと——これに尽きますね。そのような思考は、誰もが宿しているものです。若い子たちがその潜在的な力を自覚し、自ら伸ばしていく。それがこの国際学部という場だと思っています。

モリソン：当然と思えるものを、もう一回見直す・考え直すこと。これこそが一番大事なことでしょう。